

一九六五年版・推理小説年鑑
日本推理作家協会編

東都書房版

2



推理小説ベスト

24

—2—





**1965年版
推理小説ベスト24 (2) 定価600円**

昭和40年7月15日 第1刷発行
編 者 日本推理作家協会
装幀者 小 林 泰 彦
発行者 斎 藤 修 一 郎
印刷所 豊国印刷株式会社
製本所 文 信 社
発行所 東 都 書 房

東京都文京区音羽町3丁目19番地
電話東京(942) 1111 振替(東京)72732

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

1965年版推理小説年鑑

推理小説ベスト24／2／目次

ギズモ・・・・・・・・・・	加納 一朗	5
黒い蜜・・・・・・・・・・	菊村 到	21
さ迷える魂・・・・・・・・	黒岩重吾	35
崩れる・・・・・・・・・・	佐野 洋	67
汐が満ちて……………	多岐川 恭	85
ねじれた部屋……………	土屋隆夫	101
史蹟……………	戸板康二	149
黒い真珠……………	南條範夫	161
三の酉……………	日影丈吉	199

終末の日	・ ・ ・ ・ ・	星新一	213
環(わ)	・ ・ ・ ・ ・	山田風太郎	219
疫病	・ ・ ・ ・ ・	山村正夫	241
1964年作品目録	・ ・ ・ ・ ・	中島河太郎	
〈創作〉	・ ・ ・ ・ ・		291
〈翻訳〉	・ ・ ・ ・ ・		299
〈評論随筆〉	・ ・ ・ ・ ・		306
〈単行本〉	・ ・ ・ ・ ・		318

ギズ
モ

加納
一朗

やあ、しばらくだったな、きみ。

この前、会ったのはいつだったろう。確か夏だったな。このせまいようでいて広い都会の、しかもこんな雑踏している街中で、偶然、親友のきみに会うとは正に奇遇だ。握手をしよう。

ほう、だいぶ景気がいいようじゃないか。きみの手のその指輪、仕立下ろしの服、さてはボーナスがたんまり出たとみえる。きみの会社は前々から好況だったからな。そろそろ結婚するんじゃないか。独身、二十八歳、身体強健、将来の重役候補ともなれば、引く手あまただと思うが、まだ特定の人はいないのか。まあ、久濤を叙しに、そのへんの喫茶店にでも入ろうじゃないか。

急ぐのか？ では、仕方がない。歩きながら話をしよう。きみの詮索好きな眼が、ぼくを上から下まで見ているのは先刻、御承知だ。失業して巷に投げ出されたはず

のぼくが、七万円のツィードなんか着込んで、歳末の街を悠々、歩いているのだからね。その後の話、聞いてもらえるかい。実は、ぼくも話したくて仕様がななんだ。

本当のところ、半月ほど前まで、ぼくは首を吊る縄を買う金もないほどだった。きみは新しい年が一月足らずでやってくるというのに、街々に鳴るジングル・ベルを聞きながら、ひもじい腹をかかえている状態を経験したことがあるだろうか。師走の買物を考えている無数の人人のなかにただ一人、絶望的な未来をより絶望的に考えて、冷たい風が枯れた街路樹の梢を鳴らす下を、あてどもなく職探しに歩いたことがあるだろうか。

多分、なにもに違いない。きみは物質的にはなんの苦勞もなく育ってきた人だ。幸福は不幸への掛橋だと誰かが云ったけど、きみは順調すぎて不幸の存在など知らないだろう。人生に様々の起伏転変はあるとはいえ、きみにとっては、運命のサイコロは常に勝目と出る。半月前のぼくとは、その環境において、人生において、すべてにおいて正反對の恵まれ方だ。——こんなふう云うと、きみはぼくが地球上のあらゆる不幸をひとりで背負いこんでいるようなことを云っているが、実際は一回、失業しただけじゃないかと云うだろう。その通りだ。しかし、それまで給料が安いとはいえ、十年あまりもぼくの生活の基盤となっていたものが、或る日、突然、失わ

れ、年の瀬を控えた路頭に、なんの前触れもなく投げ出されてみたまえ。くさくさもするじゃないか。おまけに退職金も出せない、と倒産した社長に宣告されれば、いい加減、気も減入るじゃないか。

そのときのぼくの気持、決して大袈裟でもなければ被害妄想でもないとかわかってくれるだろう。それが、どうして、そんなに浮々しているのだった？　そうだよ、その話なんだ。その話をきみに話したくって仕様がなかった。

ぼくは失業した。呆然自失というのが当時の偽らざる感情だ、何しろ本当に突然、不渡手形を出して、会社がつぶれたんだから、いきなり、ぼくのような無気力、怠惰な男に頭を切り換えろといったって無理な話だ。

ぼくはいつものように朝、眼をさまし、枕許の時計を見て、会社に遅れそうだとあわてて起き上がり、服を着換えネクタイを結んでしまつてから、もう行くべき会社がないんだと気がつく、がつくりしてその場に坐りこんでしまった。途方もなく長い空虚な時間が、ぼくの前に開けた気持だった。長年、培われてきた習性が、或る日の或る時点を境にして、唐突に断絶するとうるさくなると思う。脱線した電車みたいに何もかもがめちゃめちゃだ。サリーマンの軌道が崩れると、ぼくみたいに小心翼翼と十余年、若い癖に安心立命の境地に達して単調さに

飼馴らされた生活を送ってきた者には致命的でさえあるのだ。

ぼくは失業第一日を、ひどい憂鬱と不安と倦怠にかこまれ、一步もアパートの部屋から出ずにすごした。別の輝かしい未来を模索する心構えも、なるようになれという棄鉢な気分もできていなかった。乏しい財布の中身を数え、部屋のわずかな調度で売れるものを数え、アパートを追ひ出されたらどうしようなどと思って、その目を指折り数えてみる始末だった。

夕方になって、ぼくはようやく気を取り直し、わびしい食事を作り、喰べた。冬には珍しい雷鳴を聞いたのはそのときだった。ぼくは窓辺に立って、空を見上げた。すっかり夜になっていた。漆黒の夜空に、青い稲妻が走った。それは光るたびに幾層にも重った厚い雲の壁を浮上らせ、下界を月の光で見えるように青白い隈で浮彫りにした。冬の冷たい大気のなかで、稲光りはことさらに冷たく見えた。凍った花火と云おうか、海底の青さと冷たさを持った雷だった。

ぼくはしばらく窓をあけて、稲光りを眺めていた。雨は遠いところへ降っているのかも知れなかったが、付近には降る様子はなかった。やがて、だしぬけにぼくの頭上で青白い光が一閃した。ぼくはあわてて窓を閉めた。室内は冷えきっていた。ぼくはガストローグの炎を強く

し、かじかんだ手をあたためた。

間もなく雷は遠くなった。稲光りも次第にうすれ、東の空へ移動していった。ぼくに、また退屈で空虚な時間が戻ってきた。所在なさに煙草を立て続けに吸い、それからボクシングの中継があるのを想い出して、テレビのスイッチを入れた。このテレビとも、もうじきお別れかも知れなかった。殴り合いでも見ていれば、ぼくの憂鬱も少しは晴れるだろうと思ったのだ。

ぼくは画面を見易い位置に身体をずらせ、リングで戦うチャンピオンと挑戦者の興奮を期待した。しかし、音も画も出なかった。ついていないときはついてない。主人が失業すると同時に、テレビも主人に奉仕することはやめてしまったらしい。スクリーンには青白い輝線が走るだけだった。ぼくはチャンネルを切り換えた。どこも同じだった。故障したのだろうか。落雷があったとしても、全部の放送局の機能が停止することは考えられなかった。

「ちえっ」

ぼくは舌打して、スイッチを切ろうとした。そのとたん、スクリーンは眼になったのだ。

そうとしか云いようがない。ブラウン管の輝線は波を立ててゆれ、なんとなく十六インチの大きな眼になって、ぼくをみつめたのだ。ぼくはおどろいて、切ろうと

していたスイッチから手を放し、ブラウン管をみつめた。

よく見れば「眼」とは云えなかった。しかし、ぼくにそれがどうしても「眼」であるように思えたのだ。ぼくはぼくの一挙手一投足がまともにみられているのを感じた。

スイッチを切るな、とだれかが云った。ぼくはあたりを見廻した。もちろん、ぼくだけだ。この部屋にはぼくしかない。

あたたかい、とまただれかが云った。まるで一番風呂に入った横丁の隠居のように充足した声だった。しかし、男の声でも女の声でもない。スクリーンに「眼」を感じたのと同様、それはただの「声」だった。その声はぼくの頭のなかでひびき、脳細胞のあいだを浸み透っていった。

「だれだ？ どこにいるんだ？」と、ぼくは思わず口に出した。

「きみの前だ」と、声は云った。「電子流が強くなってきたぞ。ますますいい」

「出てこい」と、ぼくはどなった。

「出るわけにはいかない。バルスが同調した以上、ここに住まわしてもらおう」と、相手の「声」はぼくの脳で炸裂した。

「なんのことだ。一体、だれなんだ？」

「つまり——食事にありついたというわけさ。しかし、きみに私を理解させることは至難なようだ。私はきみの知能を走査して言葉を選んでゐるのだが、きみの語彙の貧弱さから押して、私の概念すらも伝えることは困難なようだ。きみの言葉で云うと居候だね」

「居候？」ぼくは思いがけない言葉にびっくりした。

「居候というのは寄生的な存在という意味も含まれているようだ」と声はうかがうような調子で云った。

「私はきみに寄生するつもりはない。ただ——たまたまここに電子流の発生する熱源があったから落着いたままだ。いや、もう少し正確に云うと、雷雲と漂流中に偶然、ここへ引掛る羽目になったのだな。私の実体は、ない。簡単に云うとイオン化した生物だ。電気エネルギーを蓄積して動く知能体とでもいうか。いずれにしても、君のボキヤプラーはなんて貧弱なんだ」

「声」はじれったそうな調子をこめた。

「余計なお世話だ」と、ぼくは云った。全く要らぬお世話だ。勝手に人の頭の言語中枢だか記憶中枢だかを走査して、ぼくの言葉でしゃべっているくせに、悪口をばざくなんてもってのほかだ。

「とにかくテレビのなかに頑張っているなんては迷惑だね。どいてくれ」

相手がイオン化しようとして、電気エネルギーを蓄積した乾電池みたいな奴だろうと、ぼくには問題外だった。問題なのは折角のテレビが見えないことと、おかしな奴が電気を余計に食って、玄関の外の積算電力計のメーターを上げることだ。ただでさえ、財布の紐を締めなければならぬ際に、余計な電気料を取られることだけは御免蒙りたかった。

「心配するなよ」と、奴は長いあいだの友人のような調子で云った。「くよくよするな。今、どくよ」

テレビに画と音が復活した。ぼくはボクシングにチャネルを切り換え、今までの奇妙な対話は一瞬、自分の気がおかしくなったか、夢を見ていたかのどちらかであったかと思ひこもつとした。酒を飲んで正体不明になり、失業の苦痛と同時に、いまのとうてい正気の沙汰とは思えないやりとりを、すっかり忘れてしまえたらどんなにいいだろうと思つた。しかし、ぼくの小さな部屋のなかに、森羅万象ことごとく揃っていたとしても、酒だけにはなかった。だから、おかしいやりとりを忘れるわけにはいかなかったのだ。実際のところ、テレビの画面は上空だった。折も折、チャンピオンは挑戦者を強烈な左フックで、リングにのぼしたところだったが、ぼくの気持もダウンした挑戦者と同じ夢うつつだった。

気持が落着いてくるまでには、かなりの時間が必要で

あった。落着いてくると、ぼくは自分の心臓の鼓動が、烈しい勢いで動いているのによく気付く有様だった。ぼくは驚いていることを意識できないくらい驚いていたのである。

ぼくの次の行為は、自分の気が一時的におかしくなっていたことを確かめることだった。ぼくはおずおずと立上り、テレビの背面にまわつて、なかをそつとのぞきこんだ。見た限りではなんの異常もない。いくつもの電子管が赤くつき、ブラウン管やらスピーカーやらが詰めこまれている。ぼくは勇を振って裏蓋をはずした。

何もいなかった。たなびく雲のようなものも、小人もいなかった。ぼくが一時的に気が触れ、いもしない相手と対話したのは確かだった。次にぼくはテレビの下に首をつっこんで、底部をのぞいた。そして、いよいよ気がおかしくなっていた事実を確認すると、はじめて安心してきたから妙なものだ。

だが、ぼくがまた前面にまわると、そこに「眼」がいた。

「のぞいても見えやしないよ。私はただ在るだけだからね。厳とした実存だがきみたちの存在という定義にはあてはまらない。探しても無駄さ」と、「声」は云い、それからいくぶんあわてたように云った。

「きみの思考中枢の分子配列に混乱が起きようとしてい

る。私のことが直接的な刺激となって、分子を転位させているらしい。思考波に一定しない波が現われつつある。おい、今、元に戻してやるからじっとしているんだ」

そのとたん、ぼくの精神は永遠の沈静と静謐のなかに沈んでいった。一日に四十八時間の時を刻む時計のように早く動いていた心臓は、ゆっくりと確実なテンポで打ちはじめ、頭のなかで廻転しはじめていた虹のような光彩は消え、眼前にかかりかけていたもやは晴れ渡った。よく眠り充分休息をとったあのような充実感が全身に漲った。そして、ぼくは今や「眼」の存在を無条件で肯定していた。

「直つたようだな」と「声」は云った。

「おかげさまで」と、ぼくは答えた。

「私のいることで細胞の分子構造と神経細胞の変化収縮をきたすとは、きみも相当単純な未開の生物だな」

「なんと悪口を云われてもいいが、いったい、きみはどこから来たんです？」

「どこ？ その質問は的確ではないね。われわれはどこにでも普遍的に存在している。この宇宙にはどこでもだ。たまたま放電している雲と移動しているうちに、ここをみつけたというわけだ」

彼ははじめてわれわれと複数を使った。

「すると、あなた方はこの宇宙空間に相当数いるのですか？ 危害を加えることはないのですか？」と、ぼくは知らず知らずにいねえな言葉使いになって訊ねた。

「沢山いるさ」と、彼は云った。「銀河系内だけではない。無限の宇宙、島宇宙、星雲、正と負の宇宙、いや、四次元の宇宙にもだ——。われわれは何に対しても危害など加えない。論より証拠で、きみの故障しかけた思考中枢の機能を修復してやったではないか。そういうことを、きみたちの言語では……サービスというのか。」

では、私の仕事は第一にサービスだ。宇宙空間の生命体とは協調することをモットーとしているんでな」
どこかでしょっちゅうお目にかかる文句を、変テコなもの云うのは、なんとなくそぐわない感じだった。しかし、考えてみれば彼の「声」はぼくの言葉、ぼくの知能の投影なのである。ぼくの内部から適当に言葉もセレクトしているとすればサービスという概念はぼくのものに違いない。

「それで……」と、ぼくは少しばかり遠慮深く云った。「いつ、ぼくのテレビから立退いてくれるんですか？」
「ここは快適だ。ずっと住むつもりだ」
「しかし、それは困る。テレビは見えないし、第一、御家族が心配するでしょう」
「家族とは面白いな」と、彼はべつに面白くもなさそう

な「声」で云った。「きみたちのような生体間では「居候」はその宿主に対して滞留期間中の代価を支払うらしい。私もそうすればいいのだろう」

「家賃でも払ってくれるのすか？」

ぼくはびっくりして叫んだ。

「各種の生命体と理解し協調するには、その生命体の習性に同調しなければならぬ。これを郷に入れば郷にしたがえと云うのか」

「そうです！」と、ぼくはまた叫んだ。

きみ、こうしてぼくと奴との奇妙な共同生活がはじまったのだ。アンテナに引掛ったおかしな奴と水入らずで暮す生活がだ。ぼくは彼をテレビに住まわせる代りに、彼から「家賃」をいただくことにした。しかし、流石に通貨は無理だった。ぼくにとっては失業保険以上に切実な要求だったが、イオン化したエネルギーの塊まりに聖徳太子を出せといっても無理な話だ。ぼくと彼とはそのことについて何回か話し合った挙句、現状ではぼくが数字の印刷されたミツマタを痛切に欲し、それが無いことには生命体としての機能を保持させるのすら不可能であり、ひいてはテレビも手放さなければならなくなるであろうという事実を認識させた結果、彼はそのことに適切な助言をするという線で「手を握る」ことになった

た。その適切な助言というのは、彼の知識を活用して、ぼくが新しい商売をするというのである。

「一日二日、待ちたまえ」

ぼくは彼の言葉にしたがつて二日間、待った。心のかかに彼の言を全面的に信用してよいものかどうかという危惧があったにしても、なんのあてもないところにあるができたのだから、それを頼みにして待つよりなかった。

二日目の夕方、アパートのドアをノックするものがあった。あけてみると奇妙な風態の小男が、片手に小型のスーツケースみたいな箱を提げて立っていた。おっそろしく猫背で、わずかのあいだにも背がだんだん跼んでゆくようにみえる。顔といったらこれが人間の皮膚かと思ふくらい鉛色の金属そっくりで、老人なのか若者なのかいくら見ても見当がつかなかった。その男はぼくの名を確かめ、それから口のなかで何やらブツブツ云い、ぼくにはその一部が聞えた。

「なんちゅう重力じゃ。息が苦しくてこれ以上おられぬわい」

「何の御用です？」と、ぼくは気味が悪くなつて訊いた。彼の着ている黒い袋みたいな服はどうやって着るのかと思ひがらだ。

「これを届けに来たんじゃよ。全くなんというところ

じゃ。よくこんな住み難いところに住んでおるな。ホレ……」

老人は？ 提げていた箱をぼくの足許に置くと、そのときには二つに折れそうになった背を丸めて、向う側に抜ける輪が、早く行かないと重力でつぶされるというような、わけのわからないことを呟きながら姿を消してしまった。ぼくは呆氣にとられて男の立去った玄關の方角をながめ、それから彼の置いていった箱を手にとった。誰が届けさせたのだろう。男が重い重いというから相当重いのだろうと思つて持上げたとなん、ぼくは反動でかにもいに手をおつけた。箱は空の紙袋ぐらいの軽さでしかなかったのである。

いったい、誰が——。ぼくにはまるで心当りがなかった。箱は鈍い金属性の光沢を持っていて全体が白っぽく輝いていた。電燈を受けていない面も同様に輝いているところからみて、この輝きは箱自体発光しているもののようにである。中央に筋が走り、把手みたいなものがついていた。

「来たな。それをこっちに持つておいで」

振返るとつけてもないテレビの画面が青白い眼になつて光っていた。彼はこの箱のくるのを知っていたらしい。ぼくは軽い箱を室内に運び入れた。

「これが金儲けの道具さ」と、声は云った。すると

この箱が家賃製造機なのか。

「あなたが届けさせたのですか？」

「そうだ。クラタカス銀河の友人に依頼してな」

「なんですか？ これ」

「あけてごらん。中央の筋を押せば開く」

ぼくがその通りにすると、箱の、筋のついた表面はするするとまくれるように開いた。ぼくは外部と同じように白く発光している内部をのぞきこんで思わず我が眼を疑った。

なかは深い井戸みたいだった。畳の上、三十センチほどの高さしかない箱のなかで、深い井戸のように深いのだ。箱の両側に沿って得体の知れない器具がいっぱいつまっていた。

「空間分子変換製造機一式だ」と、声〃が云った。

「その、なんとかはなんなのですか？」

「説明するから、出してみたまえ」

ぼくはおそろおそろ箱のなかに手を突込んで、いちばん手近なところにある透明な曲りくねったチューブを引っ張り出した。そいつはガラスのように透明で、しかも絶対にガラスではなかった。

「深いように見えるだけだ。手を差入れればみんな出せる」

自信ありげに彼が云うので、ぼくは手を入れて次から

次へとなかのものを取り出した。どういうわけか知らないが、道具はあとからあとから箱から出てきた。部屋は器具で足の踏場もないほどになった。その器具たるやこの世の最高の気狂いですから考えつかないほどのおかしなものだった。腕時計と洗濯機が結婚したらこんな子供が生れそうだというような歯車やら、逆立ちして地獄を見たらこんなふうに見えるのではないかと思われるほどの異様なチューブやら、奇妙な色を発してブルンブルンふるえている金属やらが、続々と出てきたのだ。

「次元を畳んでセットにしてあるんでね」と、彼は云った。次に彼はぼくに指示して、妙なガラクタを配列させた。

「クラタカス銀河では……」と、彼は云った。「すべての物質の生産をこの道具でやっている。きみの言葉で言えばこれは無から有を生み出す機械だ。空間中の各種分子を原料として小はバクテリアから大は恒星まで生産できる。ただし、これは携帯用だから、精々、衛星程度が生産限度だがね」

ヒヤッとぼくは息を洩らした。ぼくは神かけて誓ってもいいが、この地球に、月以外の衛星を作るつもりはない。星をいくつ作って、ぼくの明日のパンを保証してくれるわけではない。

「何を作りたい？」

金と云おうとして、ぼくは唾を呑みこんだ。ぼくに

とって咽喉から手が出るほど現金が欲しいのは当然だが、良心や罪の意識は持合せている。たとえかぼそくともそれがあるからこそ、何とか悪いこともせずに生きてきたし、これからも悪いことはできそうにもない。無気力な消極性はこんなところに効用がある。それに日常世間的な道德律の規範のなかで育ってきたぼくの小市民的な感情は、社会通念の枠からなかなか抜け出せるものではない。ニセ金作りになるのはどうも気が進まなかった。やはり金は日銀発行のものを他人から吸収するほうが良心の呵責を受けなくてすむ。

紙幣を除くと、すぐに金に代えられる高価なものはないだろう。月並ではあるが、ぼくはとりあえずダイヤモンドならよからうと思った。

「ダイヤとは炭素の化合物だな。そんな単純なものがここでは価値があるのかね。未開、かつ古典的な風習だな」彼は文句を云ったが、ぼくには全然気にもならなかった。ぼくは彼の指示にしたがって歯車をセツトし、ブルブルふるえている金属（これは分子合成駆動モーターなるものだと教えてもらった）をチューヴの端に連結させた。するとチューヴのなかをスペクトルに似た光が走り、先端のラッパ型の口からもややもやした霧が吐き出された。霧は拡散することもなく、畳の上に沈下し、その

まま堆積されすぐに凝縮して固体のかたちをととのえていった。その塊まりがなんと直径二メートルもある球型のダイヤだと知ったとたん、ぼくは気が遠くなった。

「しっかりしろ！」と、彼が叫んだ。

「い、いくらなんでも大きすぎる」と、ぼくは息を喘がせながら云った。「これじゃ切売りもできやしない。ほんの直径一ミリぐらいのが二つ三つあればいいんだ。それだけだって結構金持になれる」

「哀れな生物だな。では、やり直した。歩行機能はいるのかね」

「歩行機能？ だれの？」

「もちろんダイヤのさ。アリル第七惑星の炭素系生物の形態と同じになる」

「歩くダイヤなんてごめんだ」

ぼくは身ぶるいした。世の女性がこそって歩くダイヤをベツトにする図はてんでいただけなかった。餌は何をやるのだろう。ぼくはふたたび彼の指示に従って、二メートルのダイヤを分解吸収させた。惜しかったが、いくらなんでもあのバカでかいダイヤをかついで宝石商に持ちこむわけにはいかない。鳩の卵大のダイヤですら、古来それにまつわる血なまぐさい伝説と闘争の歴史は無数にある。直径二メートルでは水爆戦必至である。

ラッパの口から米粒のような宝石が三粒ころげ出たと